

ニューズレター 第5号  
平成4年10月20日

## 日本精神保健看護学会

-The Japan Academy of Psychiatric and Mental Health Nursing-

事務局：  
〒150 渋谷区広尾4-1-3  
日本赤十字看護大学内  
(学会会長：稲岡文昭)  
TEL：03-3409-0875  
FAX：03-3409-0589

精神保健法制立の7月。その月の第1週の土・日を当学会開催恒例日としようという申し合わせ通り、本年7月4日、5日「精神看護の未来と現実」を学会メイン・テーマとして、日本赤十字看護大学において総会・学会が開催された。

総会では、鹿児島大学医療技術短期大学部、柴田先生が議長として選出され、理事会事業報告、収支決算報告1)第1回日本精神保健看護学会学術集会決算報告、2)平成3年度日本精神保健看護学会決算報告、3)会計監査報告がなされた。続いて、議案として、平成4年度事業計画案と平成4年度収支決算案が提出され、満場一致により、可決された。

事業報告の主たる案は、

- 1)第3回学会総会、学術総会が平成5年7月3日(土)、4日(日)で、場所は引続き日本赤十字看護大学での開催。
- 2)第2回学会誌の発行。
- 3)ニューズレターの発行。平成3年度は年2回としていたが、平成4年度は、年3回とし、内容の充実化を図りたいとの意図が示された。
- 4)教育活動委員会の設立案が提示され、可決された。教育活動は、羽山理事、河野理事が中心となり、学会メンバーの研究に対するアドバイス、サポートシステムを試案中であり、今後の活動が期待されることである。

また、平成4年度修正予算が、提示され、可決された。(詳細は、折込み紙を参照されたい)総会終了後、学会会長により「心の健康に援助する人のメンタルヘルス」と題し、基調演説がなされた。(学会誌2号に掲載予定)

ついで、昨年に引続き下記のように5会場にてワークショップが、1会場にて講義形式によるものが行われた。

- 1)精神力動概念を用いた事例検討(粕田)
- 2)第4回精神(科)実習検討会(川口)
- 3)看護におけるグループアプローチ(武井)
- 4)カウンセリングの応用(横田)
- 5)リエゾン精神看護学習会(池田)
- 6)アセスメントと看護の評価(羽山)

2日目は、5会場に分かれて、下記の研究発表が行われた。

- 1)学生の教育に関するもの
- 2)患者のケアに関するもの
- 3)家族の援助に関するもの

4)看護職、チームに関すること

5)その他のテーマに関すること

午後からは、“精神看護の過去・現在・未来”というテーマのもとにシンポジウムが行われた。宮良康永・東京武蔵野蔵野病院看護長が精神科看護に夢と希望とロマンと求め、一精神科看護の今後の役割と課題と題し、社会復帰病棟での包括的地域リハビリテーション活動を勧めるためのプロジェクト・チームを作り、活動を推進していった経過とそこでの実践報告がなされた。ついで、予定であった松崎澄子・長野県立駒ヶ根病院総婦長が残念ながら、急病のために出席できず、ピンチヒッターとして同病院看護長・二瓶秀則より一精神看護の足跡一開放した精神病院の中で一と題し、全病棟開放、20余年の看護者としての気苦労に触れ、生活療法の見直しから始まる集団から個別へのアプローチの視点が述べられた。2人の臨床実践に裏づけられた言葉の重みに、参加者は共鳴していたように思われた。

宮本真弓・東京都精神医療総合研究所、医療看護研究室からは、精神看護における臨床・研究・教育の統合と看護者の主体性確立と題し、対人状況における異和感への気づきに始まる内省、“異和感の対自化”をキーワードとして、精神科での医療現場に触れた時の異和感の体験に基づく内省確立への展開を論じていた。精神分裂病患者を前にしての、医療従事者が抱くプレコックスゲフェールにも似た体験として理解したが、参加者の感想として多々あったように、次にその理論的發展を学習したいと思った次第である。

最後に、川名典子・聖路加国際病院婦長がリエゾン精神看護の立場から一精神科的知識と技術の活用に向けて一と題し、一般病院の中で精神を脅かされる人々の事例を紹介し、今後の精神科の発展と期待が述べられた。ひょっとすると、先んじてリエゾン活動を通じてこそ一般内科、外科病棟の医療と精神科医療の2つの領域に橋がかかるのではと期待したのは、私だけであろうかと思いつつ傾聴した。

4人の方々のそれぞれの臨床での体験を基にしての発言は、含蓄があり、聞く者に共鳴、共感をもたらし、また、各々の人が、来年お会いできることを期待しながら学会の幕を閉じた。

### 第3回学術集会企画案

\*と き：平成5年7月3日(土)、4日(日)

\*ところ：日本赤十字看護大学

\*メインテーマ：精神看護とチーム医療一専門性をめぐって一

<第1日>

13:30-13:40 学術集会オリエンテーション

13:40-15:10 特別講演：「チーム医療における専門性」 鈴木純一先生(海上療養所)

15:20-17:30 ワークショップ(6分科会)

18:00-19:30 懇親会(日本赤十字看護大学内)

<第2日>

9:30-12:00 一般演題発表(発表・質疑含めて1題30分)

13:30-16:00 シンポジウム「精神医療におけるチームアプローチ」

一他職種と看護の接点を探る一

司会：粕田孝行

シンポジスト：交渉中

コーディネーターの稲岡文昭教授（日赤看護大学）と共に、全国の仲間17名が参加し8月17日から10日間、第5回アメリカ精神科看護研修ツアーがもたれた。90年に続いてメニンガークリニックで、またメニンガー小児病院とオニール在郷軍人病院での研修と合わせて、施設見学をした。

メニンガー・クリニックは、アメリカのほぼ中心に市するカンザス州トピーカ市に50万坪の広大な丘陵地帯に10床から24床の危機・短期・長期・中寿・摂食障害の病棟がある。医師、心理士、PSW・活動療法士・看護スタッフで構成されたチーム医療を展開し、治療理念として力動精神医学的理解を取り入れている。また、治療・教育・研究・予防部門からなる総合的な精神医療施設として機能している。

めぐまれた環境と豊富な人材のもとで、高度に確立された看護理論と実践に接し、感嘆しながらアツという間の3日間だった。朝8時10分から17時まで質疑を合間にビッシリ講義を受け、ホテルでは夜遅くまでディスカッションを行うなど非常に有意義なものであった。

ペプローの看護理論をモデルにした精神力動看護の概念から始まり、自傷self-mutilation患者と中毒患者の看護、摂食障害の看護と活動療法について、また神経生物学-精神分裂病に関する最新情報、小児病院での外傷後に伴うストレス障害（PTSD）児の治療と看護に対する理論的展開と専門ナースによる講義に、日本の現状と比較すると、嘆息するのみであった。

私の見学した12床の中毒病棟では、患者1名に2名以上のスタッフが配置され、学会が認定した中毒専門ナースがおり、いかなる患者でも治療可能だとする信念を持ち、アプローチしているのが印象的であった。3日間を通して、集団療法の専門家である看護部長が、非常に多忙な中を終日笑顔を決やさず、誠意をもって対応してくれたのが、大変嬉しく思ったが、さて、日本での私達ナースの表情は？と思った次第である。また自信にあふれた職員達とカフェテリアで食事を共にしている誇らしげな患者の姿が今でも強烈に目に焼きついている。

\* \* \* \* \*

#### 国立精神・神経センター武蔵病院 市河正文

この研修は稲岡先生が代表となり、7年前から毎月第3土曜日に日赤看護大学で精神力動看護学習会が中心となり、呼びかけたもので、今回で5回めの企画である。今回の研修は、前回に引き続き精神力動の発祥の地にあるメニンガー病院看護部が企画した3日間の教育プログラムである。

私は今回の研修に当り、40歳という節目で今後役立つためには、今が一番よいと考え、参加した。

研修内容は講義、ディスカッション、見学である。講義はメニンガー病院の歴史、精神力動理論、自傷について、アクティブ・セラピー、薬物療法、米国の精神保健法と研究課題、ディスカッションでは境界例の講義と事例検討回が行われた。「自傷」について、リスト・カットとか爪を剥ぐ等をイメージしていたが、ペニス・カットや陰部熱焼など衝撃的な内容があり、その背景には米国の文化や性的虐待などにも関係があると述べていた。

「アクティブ・セラピー」では、作る喜びを獲得することや摂食障害の患者はボディイメージに障害があるので実際に自分の服を作らせていた。数多くの作業メニューを患者にどう選択させるかでは、自分の得意なものは選択させていないとのこと。得意なものは病的なものが隠されてしまうからだと言明があった。病棟見学では、保護室は15分に1回必ず巡回して会話し、その内容をカルテに記載する義務が法律で定められていた。場所を移しメニンガー小児病院では心的外傷体験と性的虐待の講義と病棟・学校の見学をした。性的虐待では、入院当初からわかる訳ではない。何週間か経過する中で、重大な家族の秘密をしゃべってもよいのだという雰囲気の中で看護者が知る。この問題は米国でも最近わかってきて、予後等の諸問題の研究はこれからだとのこと。

州立精神病院では、前思春期障害と犯罪者の精神障害について講義をうけた。人権問題で病棟見学はできなかった。精神障害者の犯罪について、日本では精神障害者と鑑定されると刑事罰がまぬがれるが、米国では精神障害者と鑑定されると精神病院で治療を受け、治療後裁判を受け、刑に服すと説明していた。

連邦軍人病院ではICUと精神科病棟の見学ができた。看護部長のクックさんは戦争による精神障害の問題や看護部長の業務などくわしく話された。講義はすべて稲岡先生が同時通訳された。メニンガーの看護部長ワシントンさんは3日間の全ての日程に同席された。副看護部長のリンダさんは稲岡先生が20年前に1年間メニンガーで研修した時の同期生であった。

研修は午後5時に終わったが、夕食後2時間その日のフォローアップとディスカッションを行った。研修最後の夜、お世話になった病院関係者を招待したパーティーを持ち、交流した。メニンガー病院より研修終了証書をいただいた。機会があれば、多くの方が参加されるよう、呼びかけたい。

## <第3回学術集会一般演題の募集について>

### 1. 実践報告部門の新設について

本学会では、演題募集にあたっては、研究に重きを置いて考えてきたが、第3回学術集会の演題発表では、従来どおりの(1)研究の発表部門に加えて、(2)実践報告部門を設けることにした。

それは、実践と研究のより有効な連携と、双方の水準向上を図るのがねらいである。実践報告では、より新しく創造性に富む実践を広く紹介することで、実践への意欲と看護の質を高めると同時に、ディスカッションを通して、実践からさらに研究へと発展できるような研究的な視点や、具体的な研究方法の示唆も得られるようにしたい。それによって、次にはその実践報告が研究部門での発表に繋がっていくことを期待し、新設した。

### 2. 発表形式について

発表は両部門とも、第2回と同じく質疑応答を含めて1題最低30分とする。また、抄録原稿は専用原稿用紙を用いて、発表者がワープロ打ちにしたものを提出していただく予定です。(専用原稿用紙については、事務局に問い合わせ下さい。)

3. 発表演題×切: 1月15日 (はがきに演題を記入し、1)研究部門か、2)実践部門かを明記して送付)  
3月15日 (抄録原稿×切。専用原稿用紙使用のこと)

## 事務局より

○学会員宛の郵便物が戻ってきています!!

住所や所属の変更(電話番号を含む)は、文書で事務局へご連絡下さい。

次の方の転居先が不明です。連絡先をご存知の方は、事務局までお知らせ下さい。

→ 高知市 山崎多美恵様 (会員No.165)

○平成4年度年会費納入をお願いします。

平成3年度年会費(7,000円)および平成4年度年会費(7,000円)の納入状況を封筒表の住所タックに記載しております。

また、年会費未納の方には、振込用紙を同封しておりますので、郵便振込通知書にて、納入下さい。

年会費の口座番号は、東京4-38594ですので、おまちがいのないよう、お願いします。

年会費は7,000円、平成3年度分からの年会費が未納の方は、14,000円となっております。

なお、振込用紙はおひとり1枚ご使用下さい。

○本学会は、世界精神保健連盟1993年世界会議の後援団体となっておりますのでお知らせをお届けいたしました。

○本学会は、平成4年10月2, 3, 4日に開催されました日本看護科学学会第1回国際看護学術集会に協賛団体として、3万円を寄付いたしました。

## 編集後記

学会誌、第1号が発行されました。表紙のデザインはいかがでしょう。スカイブルーを下地にし、目に見えない光の進行を表しています。まったくおこがましいことですが、表紙のデザインを見て、ダリのダブルイメージ、すなわち「目はいつも何かを見るが、本来とは異なるイメージを探し求める」ことができれば幸いでありませぬ。"視覚への確信と不安"すなわち、実際に目にしているものは、常に何か別のものであるかもしれないとの思い、それが私達の実体験を豊かにするものなのかもしれません。

学会誌作成にあたり、J.C.S.出版の鷺谷社長、岩田氏に随分お世話になりました。この誌面をお借りし、お礼を申し上げます。

また、会員の皆様、まだ少々在庫がございます。1冊1,500円(送料別)です。身近かに入要の方がございましたら、お知らせ下さい。  
(編集委員・粕田孝行)